

# 授業づくりにおける様々な課題～10テーマ～

近藤 大典（開智中学高等学校社会科）

筆者は、中堅の社会科教員で現在埼玉県私立中高一貫校で教育現場に立っている。非常勤講師としての経験が長く、これまで8校で勤務し、国立、県立、私立、男子校、女子校、学力進学校、教育困難校、中堅学力校、中高一貫校など様々な学校を経験した。この経験から、現場で筆者自身が直面した課題を10テーマ選び、現任校における社会科教師15名よりアンケートを行って課題の論点と対処法を探った。

## 1 学校に応じた教育内容の選定

このテーマにおける学校の違いは、生徒の学力レベルという意味で進学校、中堅学力校、教育困難校などの違いを指す。また、男子校、女子校、公立学校と私立学校、6年課程の中高一貫校、と3年課程の高等学校、地域性などの違いを想定した。

アンケート結果からは、進学校の生徒には抽象的思考ができるが、教育困難校では生徒の直感的思考力に頼らざるを得ないという回答が4名からあった。授業が「成立するかどうかの問題」「生徒の反応がきているかどうか」という声があったが、こうした問題に各教師は、特に教育困難校で様々な工夫をしている。歴史における実物教材の提示や漫画を使用したり、人間ドラマで引きつけようとしたりするなどである。筆者も、教育困難校では、様々な教材を準備して挑んできた。教育困難校では毎回の授業が「勝負」であり、生徒が「今日はつまらない」と感じては、次回以降の授業にも影響が出る。一方で、各回の授業で何がわかったのか、一つでも生徒に認識させることも重要である。教育困難校の生徒は「抽象的思考が難しい」と言っても、何か一つ思考の段階を上げる説得力を内容に持たせなくては、楽しい授業もやがて生徒の興味を減じさせ、学習意欲の誘発にはつながらないと思われる。

その他、男子校、女子校の違いについては、男子校の生徒は権力や金、政治などに関心を持ち、女子校の生徒は文化や美的なものに関心が高いなど、興味・嗜好の違いについて、他には地理感覚の強弱についての回答があった。筆者は、男子校、女子校それぞれを経験しているが、地理感覚や政治、文化に対する関心などは客観的に数字を挙げて説明することは難しい。感覚的にこれらの回答に思い当たる経験があるのだが、今後の研究課題としたい。

## 2 ノートの型「板書中心型」と「プリント中心型」について

アンケートでは15名の教師中、14名が板書中心と回答した。以前はプリントを使用していたという教師も、板書中心に切り替えたという場合が多くあり、プリントは資料を提

示す補完的な役割になっていることが多い。板書中心にする積極的理由として、「書くことが覚えるうえで重要」、「書く中で考える瞬間がある」、「板書はフレキシブルに授業内で調整できる」、「絵や図を書いたりすることでイメージを持たせやすい」、「メモ力を養成できる」、「(授業内容の)流れがわかる」、などの回答があった。一方、プリント型展開の弊害として、「語句覚えのみの意識付け」、「単調になる」、「生徒の取り組みが安心感によって消極的になる」などが挙げられた。プリントの利便性は、「板書の手間が省ける」ことや、「教師間の内容の共通化」、「授業展開のスピードアップ」、「情報量を多くできる」などの回答があった。

こうした意見を踏まえると、中学生や高校低学年では情報量の少なさや授業進度の緩やかさの点から板書による授業展開が望ましく、高校2年以降は受験対策などの必要性からプリントを使用するというケースが増すという流れが予測される。受験対策を行う予備校では、板書による授業展開はするが、あらかじめ情報が網羅されたテキストが配布されていて、講師にもよるが、板書には情報を整理するというよりは要点を整理する役割が求められている。高学年の授業を板書ですべて情報を網羅しようとすれば、テンポが速くなり「書き殴る」というレベルの荒れた板書で、書き写す側の生徒が思考する間も持てない展開になりがちである。

筆者は、教師となって最初の8年間はオリジナルプリントを作成して授業展開していたが、図式化して説明することの多い地理や現代社会で次第に板書量が増えた。現任校に赴任してから板書中心に変え、歴史も中学生を多く受け持つようになり板書型に変えた。それ以前から、板書量を少なくすると生徒から「淡々としている」とか「眠くなる」という声があった。適度な量の板書は、「間」をつくり、書くことで生徒の受講にもアクセントがつくように思われる。現在では受験学年(高校3年)ではプリントを配布するが、高校2年以下では基本的に板書で展開している。社会科教師は、情報を整理するという必要があり、他教員と共同で授業を受け持つ場合は板書による事項整理が試験で出せる「内容の公約数」となる。従って、学校の生徒数規模が大きく、加えて情報量の多い高学年になれば、板書による担当者間の「誤差」をなくす意味でプリントを配布することが当然検討される。プリントによる展開を基本的にしていると答えた教師も、理由として「担当者の違いを超えて内容をそろえる目的」を挙げている。

### 3 教科書準拠型授業とテーマ的授業

アンケートでは、歴史の教師はまず教科書内容の消化を優先すべきと考え、テーマ的授業には全体に消極的な姿勢が見られた。大学入試への対応という点で、他の教師や生徒に対しても必要な教えるべき「内容の抜け」は許されないという意識が見られる。テーマ的授業は、最後に授業が余った場合や、「研究授業ならば行う」という意見も複数あり、特別な場合に限定される様子が伺える。一方で、公民や地理には「～問題」とつく項目が多く、内容によってはテーマ的授業が適するという回答もあった。テーマ的授業の問題と

して、「他教員と共同して授業を持つ場合、内容をそろえるためにたくさんの時間を共有しなくてはならない」。また、「1 クラスあたり人数が増加すると授業のコントロールが難しい」という指摘があった。

こうした点から、テーマ的な授業は科目による意識の違いがあり、また、やりたくても進度、空き時間、など時間的にできない事情があることがわかる。筆者は、公立高校や大学付属校などでは地理や政治経済で積極的にテーマを設定して授業を行うことが求められ、意欲的に取り組んで来たが、大学受験校など生徒及び保護者から学校に求められる事情により様々な「講義のネタ」が出せないことも受け入れざるを得ない。しかし、あるテーマを教師が追い、授業を通じて生徒がそれに引きつけられ好奇心を強く抱くという要素は、教師が幅を広げ魅力的授業を展開するうえでも大変重要であると思われる。

#### 4 講義型授業と生徒参加型授業の取り組み（学び合いの工夫）

脱講義型、脱画一化という意味での生徒参加型授業には、グループ学習、共同作業、発表、討論、生徒による授業展開やゲーム形式、新聞や図の作成など、様々な形が見られる。アンケートでは各教員が様々な工夫をしており、特に低学年(中学生)の授業での取り組みが多い。一方で、その課題をどの教師も感じており、具体的には、ベースとなる知識が生徒に乏しい場合の難しさ、全員参加の難しさ(参加しない生徒が出てしまう)、時間を多く消費してしまうこと、テキスト化・定期試験の問題化の難しさ、などの回答があった。

筆者も公民の授業で「憲法第9条の問題」「男女の共同参画社会について」などで討論とグループ発表を取り入れたが、上記の課題は一様に当てはまった。研究授業で学び合いを取り入れた授業を複数拝見したが、生徒の作業の成果や意見を取り込み、教師がまとめるには50分では短く、70～80分は必要であると感じた。また、クラス規模も教師の目が全体に行き届くには20～25名程度が望ましく、30人を超えると授業には入れない生徒が多いと思われる。主観だが、具体的に班を作る場合は発表などの時間を考えて5班まで、6人以上の話し合いは参加しない生徒が出やすいので、班あたり人数は4～5人が妥当である。単純な講義形式の授業でも、どの生徒にもよく目が行き届き、むらなく生徒に質問を振りながら進める場合、25人までだと行いやすい。宿題を課して授業外で作業や調べをやってもらうことで時間短縮できるが、学び合いは時間やクラス数など良好な授業環境の整備が伴う必要があると思われる。また、授業内容の進捗の問題は、現実的には学び合いにより捨象せざるを得ない内容が出るであろう。

#### 5 教材収集と授業での提示

教師は、教科書や資料集など副教材以外に、独自に教材を収集し、授業で使用している。こうした教材は、「授業でのアクセントをつけ、臨場感を持たせるために使用する」という回答が見られた。また、教材収集を通じて、教師は教材研究も行い講義内容の幅を広げている。授業で使用する教材には、専門書、新聞記事、録画ビデオ、インターネット、写真、

実物教材、自作の授業道具などが挙げられる。アンケートでは、上記の「最も多く使用する教材は何か」という問いに対し、教師間で共通性が少なかった。教材収集はライフワークでもあり、教師の個性が分かれるところであるといえる。しかし、このことは、他の教師が収集した道具の使用にやりにくさを感じることもなるようで、他の教師とビデオを使う場合「見た人の感性とともに話さなければならないので難しい」という回答があった。そうすると、各教師が収集した教材は、職人の一代限りの愛用道具のように、他の教師に継承されていかないものが多いのかもしれない。

筆者は、ビデオ教材と新聞の切り抜きをよく使用するが、ビデオの編集などは独自の視点で行っている。録画ビデオの数はもはや数えきれないほどの量になり、新聞の切り抜きも分野ごとの分類が追いつかないほどである。ある授業に必要なビデオや新聞記事を保管場所から見つけるのは他人では難しく、「この内容にはあの教材が使える」という「ひらめき」も個人的な所有教材で抱く場合が多く、すでに職人芸のようになっている。各社会科教師は、大なり小なり収集癖を持っており自宅や職場が小博物館のようになっている、収集品は教師の頭の中でしか目録化されていないため、教材の共有化もしにくいのである。

## 6 授業における「話し方」の工夫

「話し方」は広くとらえて、教師が、発声、口調、間の取り方、生徒への発問や、生徒からの質問対応、アドリブ、雑談など、教室内で授業中にどのような話術とコミュニケーションを心掛けているかというテーマである。アンケートでは、「早口にならないよう気を付けている」という回答が多くみられたが、3名の教師が当初持っていたという発声の課題は、経験と努力で解消したと答えた。「声のトーンやペースを状況に応じて使い分ける」という教師もいた。話し方の工夫は、特にしていないという回答も半数以上だったが、落語を参考にしたり、「舞台脚本を参考に無音状態を作って場面転換を図る」などかなり意識している教師も3名いた。また、特に意識はしないが、「他人の話し方の悪い点が自然に気になり、自分ではそうならないように意識する」という回答もあった。筆者自身も、ある司会・アナウンサーの話し上手のポイント（「え～・あの～・その～」を無くしてぐっと飲み込み間をつくるなど）を参考にした他、上手な観光ガイドのテンポの良い話し方を意識して取り入れてきた。以前、ある勤務校で非常に知識量豊富な教師から、「どうしても生徒には眠くなる話し方のために授業の評判がよくない」という話を聞き、話術の巧みさは生徒を引きつける重大な要素と認識して意識するようになった。授業中、教師が生徒に投げかける発問や生徒からの質問の取り込みも生徒の授業への関心を持続させるうえで重要である。

教師からの発問は、アンケートによると個人差があり、10回以上行う教師もいれば1～2回くらいという教師もいた。発問を多くすることで生徒参加型授業の要素ととらえる教師もいた。また、生徒からの質問は、多くの教師が教室内全体で共有化しようという意識を持っていた。

雑談についてはアンケートからは、生徒を引きつけるためにどの教師も行っていることがわかったが、学校全体・クラスの「空気によってできない」という場合や、雑談の内容を相手によって変えないと生徒の意欲が引いてしまうという回答も複数みられる。雑談は内容が教師によって多岐にわたり、どのようなネタを持っているかや、教師の経験の有無、個人的性格の違いによりマニュアル化しにくい。

約10年前から、NHK教育番組の一部の高校講座が、以前は一方向的な講師の説明であったものを、講師に相手役をつけて時折誰でも感じるような疑問を投げかけてそれに答えを返す、という形式に変化し、そのリズム感が好評で他の講座もこの方式を採用するようになったようだが、中学や高校の現場でも、教師が感性を働かせて生徒と盛んにコミュニケーションし、生きた質問を取り込もうと努めることで生の講義でしか味わえない高品質の授業が提供できる。よく、プロ野球の選手がインタビューで「球場の雰囲気やお客さんが打たせてくれた」と答えているが、臨場感の持つ授業効果を知り、教師が現場を多く経験していくことは、教師の実力を練成する一要素となると思われる。

## 7 定期試験づくりの課題

試験問題は、社会科の場合、語句を答える問題、記述内容の正誤問題、論述問題などがあり、問題の展開法としてリード文や文字史料、図や絵などから展開する方法が考えられる。

アンケートからは、教科の特性、生徒の学力レベル、定期試験づくりと採点に費やせる時間、大学入試問題への対応、などを意識して各教師が日頃の学習成果を試そうとしていることが伺える。全体に歴史の教員は語句をストレートに答えさせる問題を出題する傾向が強く、7~8割程度の構成という回答が多かった。論述は採点に時間と集中力要り、採点基準をそろえるなどの手間の点から社会科全体でも2割くらいという回答が多いが、総じて論述は「流れをつかんでいるかを確認する」など良問をつくれるという認識は共有していた。

試験での問い方によって「学び方を誘導する」「学習の危機感を持たせる」「生徒を楽しませる」という回答もみられたが、「特にこだわりはなく、試験で楽しむ感覚はない」など、試験づくりにかける熱の入れ具合は教師によって温度差がある。教科によっては地理など図表から展開が多く、試験づくりに大変手間暇がかかるものもあり、教師が費やせる時間の違いによって追われるように作成する教師と、創造的に工夫を凝らす教師とに分かれる。今後、質問内容に「どのくらい時間を費やしているか」「時間外労働にどのくらい頼っているか」「試験づくりをどの程度前向きに行っているか」など項目化して再び調査したいと考えている。

## 8 他教員と共同して、同一の授業づくりに取り組む場合の課題

この課題は具体的に、授業進度、教育内容、定期試験作成、授業方法、教材の選定などの点で他教員と調整が求められる。筆者は教師になって5年目で初めて直面した課題で、

それまで他の教員と共通の試験を行うこともなく、自由に授業づくりを行っていたので様々な点で「周囲と合わせにくい癖」があり、苦戦をした課題であった。アンケートからは、歴史は教科書的に進めることが多く、特に高学年では内容に大きなずれは少ないという回答が多かったが、公民と地理は内容やポイントの強弱のつけ方にずれが出やすく、定期試験作成には十分な調整が必要という認識が見られた。内容のずれを埋める対処法としては、共通プリントや教科書記述を内容のベースにしたり、話し合いを多くする、試験の採点基準を広げにする、などの方法が挙げられたが、「他人の作ったプリント（ノート案）は使いづらい」「ベテラン教員には譲歩せざるを得ない」「生徒に板書内容が他のクラスと違うと指摘された」「他クラスと視聴覚教材の使用度の差を指摘される」という回答もあり、本音では「一人で教科を持ちたい」と考えている教師も多い。

生徒数が多い学校ほど他教員と組んで共通の評価基準を持たなければならないケースが増えるが、他教員と共同する利点について挙げた回答も複数あり「自分にない視点をもらえること」「アイデアが多く出ること」などがあつた。

教師は授業内では独自性が発揮できるが、同僚との調整力と協調性も求められていて、個性を出しすぎて人間関係を損なうこともある。同僚の理科の教師が「他の教師との埋めにくいフィーリングの違いはある。ミュージシャンがよく音楽性の違いを理由にグループを解散したりするのと同じだ。」と話していたが、授業の自由度は無制限のものと誤解するとストレスを多く抱え込むことになる。

## 9 教師の「専門科目以外も受け持つこと」と「専門科目特化制」の効果と課題

アンケートは、「専門科目以外も受け持つこと」を主に聞くことになった。専門外科目を持つ利点として、「知識の幅を増やす」「マクロな視点に立てる」「内容の提示法やアプローチの手法などが学べる」「専門科目の指導にも効果がある」という回答が見られ、概ね専門外も持ってよかったと考える教師が多い。「若手の教師はやった方がよい」という意見も複数あつた。しかし、弊害として、生徒に提供するサービスの質が低くなること」「複数教科の持ちすぎによる教員負担の増加」などが挙げられ、「年度による校務分掌と重さを考慮して教科を持たせて欲しい」という意見があつた。この他、教科の相性という点の指摘もあり「日本史と世界史」「地理と世界史」「公民と地理」が関連する事項が多い相性の良い科目（関連する事項が多い）という回答があつた。

教師の専門科目をどうとらえるか（大学時の専攻科目、教員採用試験の専門科目、最も経験ある科目、自信が専門ととらえる科目など）ということもあるが、筆者は、教師生活の最初の8年間、非常勤講師として大学時に専攻した地理以外にも否応なしに世界史や日本史、政治経済、現代社会など様々な科目を受け持ち、幅を広げ奥行きも増すことができたという認識がある。バレエダンサーが様々な演目の役を演じることで演技力と自信を高めるのと同様に、教師もレパートリーが増える機会が持てると実力が大きく伸ばせると思われる。

## 10 授業づくりに取り組む時間の確保

教師は、校務分掌、部活顧問、担任などの業務を担う中で授業づくりに取り組んでいるが、その時間には個人差があり、学校の事情や、生活環境にも影響される。アンケートでは、具体的には授業で直接使う「教案ノートづくり」「授業内容の確認と反芻」「教材の編集」などの点で費やしている時間を質問したが、日常的に行われる読書やテレビ番組の視聴なども授業準備と捉える回答もあった。前者の直接使う授業教案の準備については、授業の空き時間や、夜に学校に残れる教師は生徒の最終下校時刻後2～3時間程度費やしているが、「朝早く出勤して1時間程度準備する」という回答が3名の教師にあった。しかし、結婚や子育てなどの理由から教材研究をほとんどできず、専門科目は以前に蓄積したものの再現で対応しているという回答も複数あった。「授業で話すネタの仕入れは直前に行く方がよい」という回答も複数あった。

家庭環境により、休日がどの程度使えるかという問題もあるが、多くが1コマにつき1時間確保するのが難しいという状況である。比較的時間のある若い年齢時の準備とその後の毎回の積みみで対応し、一度出来上がった教授内容には大きく手を加えず再現性を重視するというのが大方のスタイルといえる。「歴史は内容の再現性が求められる」という回答もあった。こうした点から、9のテーマであった専門外科目を受け持つことによる「幅の拡大」や授業内容に違いのある学校への赴任は、重要な知識の拡大をもたらすといえるだろう。